

正月公演記録概要

鎌倉きららホール (13 : 30 開演)
「日本浪漫学会」 1 月 8 日

テーマ：ジュン葉山と和泉元彌

鎌倉の北条時宗から七五〇年

出演：ジュン葉山、平野ユキノリ、山下優樹

ゲスト出演：和泉元彌、和泉淳子、三宅藤九郎

時代考証：日本浪漫学会 会長 濱野成秋

プロデューサー：プログラム&本稿著述同上。

We held Shogatu-koen or New Year Concert at Kirara Kamakura Hole in the memory of 750th anniversary of Genko or the Sudden Attack of Fubirai Hern from the mainland Asia.

Motoya Izumi, Kyogen Master of Izumi Clan, played the role of Shogun Tokimune of the Kamakura Government in the NHK Taiga Drama. And now he was kind enough to collaborated with us successfully showing the importance of peaceful relationship with any country any time.

第一部 愛の今昔

1. その昔、「蘇州夜曲」という名曲が…

これは1940年に発表された「支那の夜」という128分の長編映画で使われた劇中歌である。作詞が西條八十、作曲が服部良一。当時、美人女優として絶大な人気を誇った李香蘭が、水の都蘇州での舟遊びで、うっとりしている姿に、世の男性はみな参った。てっきり中国美人だと思った人が多かったが、李香蘭は日本人で固い国語の先生だった家の子。本名は山口淑子で、戦後裁判にかかり、国外追放となった。筆者も同じ川で舟遊びをした経験があるが、国際恋愛を憚る当局の心情も解かるが、ファン層はお構いなしで、彼女が日劇に来た時には、あの円形ビルが3重に取り巻くほどファンが集まった。歌詞も良し、曲もよし、こんにちでも多くの歌手が歌うけれども、微妙で、はかない、陽炎のごとく消える愛のため息がそこにある。

2. はやま恋唄 (橘かほり作詞、ジュン葉山作曲)

蘇州夜曲の恋歌は時代がわるい。同じ恋愛関係でも、それ自体が慎めと言われる要素もある。だが現代なら、同じ日本人通し、恋愛は問題ないか？ 時代が変われど、家柄や家の格、跡継ぎ問題などで、自由恋愛はご法度となる。「はやま恋歌」の場合は、神の教えが気にかかる。まして修道女の身分であれば、当人は罪の意識に苛む。

この作品は修道院の御心に甘えて愛を貫く、あどけない少女の物語である。作詞に当たり挨拶に上がった橘に優しい修道女の方々のご厚意うれしく。白砂清松の町にけなげに生きた女性の愛に生きる罪深き道。作詞橘かほり作曲ジュン葉山の新作シリーズには、いずれも悶々たる悩みの果ての光明に託す想いがある。ご期待ください。

3. なぎさ橋ブルース (作詞橘かほり 作曲ジュン葉山)

テレサテンの歌に、「奪えるものなら 奪いたいあなた、そのために誰かを泣かしてもいい…」と絶叫する恋は今の時代、わんさとある。奪っても自分の物にしたい気持ちはあっても、それをやってはいけない、相手の家族が可哀そうだとなれば、諦める方を選ぶ。

でも、自分の心は空っぽ。まるでこの貝殻のように。それをひしひしと感じたヒロインは「なぎさ橋」で絶叫する。そのうち還るよ、などという気休めを言わないで、「もう、還ってなくていいの！ 還らないで！」と絶叫する。

こう考えると、今のよう、恋愛をかなり自由にやれる時代でも、当事者には節度があつて、そのことで、孤独に耐えながら絶叫するのである。

4. 御成町ブルース (作詞橘かほり、作曲ジュン葉山)

新曲である。が、「なぎさ橋ブルース」の続きでもある。「なぎさ橋ブルース」が大変好調で、つい口ずさむ人が出て来て、このままじゃヒロインが可哀そうねといわれ、遂にその続編を書くに至った。いや、もう会うもんかと絶叫しても、未練はのこる。それにスポットを当てた。小唄に、「返してやるんじゃ、なかったに。 ふくむ未練の夜の盃」というのがあるが、離れても、未練が残るのも、恋人同士である。以心伝心、こちらの気持ちも、相手の気持ちも同じで。また別の小唄に、「近くへ来たときや、寄りゃしゃんせ 誰に気がねがえ、あろうかいひな」と来る。後ろ指をさす小うるさい小姑連は年も年、もうこの世にはおりまへん…というわけで。

5 どじょっこふなっこ（作詞橘かほり 作曲ジュン葉山）（初演）

日本の歌謡はしばしば望郷の念で満たされる。幼友達は、田舎育ちが格別で、小川や池で釣りをやり、川遊びでは粘土取り。泥鰌や鮒を母に与えて煮て貰い、食べることもしばしば。秋の田には田螺を取って食卓に。柿を取っては喰い、栗を見つけては囲炉裏で焼いて食らい、そんな遊びが毎日続くと、子等の結束は都会の子等とは比較にならないほど、強いものになる。時には小川遊びでパンツが濡れて、脱いで干している間に、お医者さんごっこ。男女の間違いがその時に自然と起こり、子供心にしっかり残って思春期に、大人に。都会に出てそれは忘れない…。「どじょうっこふなっこ」はそんな幼い仲間だった男女の素朴な性の物語から始まる。

6. 夜のプラットホーム（昭和歌謡・戦中戦後）

この歌は出征したら生きては帰らないと覚悟を強いられる時代に作詩された歌。よく聴くと、恋人ともう会えないので、女性はさめざめ涙を流して悄然と佇み、寂しく笑って「泣かないで、泣かないで」と慰める兵士の心情が痛いほど解かる。戦時中発表されて発禁となり、戦後22年に二葉あき子で21万枚の大ヒット。本来淡谷のり子の持ち歌だったが、訳あって戦後二葉に。作詞の奥野椰子夫は慶大文科卒。さぞ無謀な戦争を嘆くに余りある思いであったろう。1902年生まれで1981年10月8日死去。つい最近まで生きておられたのに、亡くなる前にお会いする機会を持てず残念至極。いい歌詞を有難う。涙と共に脱帽。作曲に協力した服部良一はこの悲しみと憤りの気持ちを当時としてはカッコ良すぎるタンゴ調に仕立て上げた。文句なしの和製タンゴの名曲中の名曲である。それを涙と共に歌い、当局から発禁処分となった淡谷さんにも脱帽である。

Jun Hayama, Singer-song writer, sung songs of her own new songs as were mentioned above but with some exceptions. No.2 “*Hayama Love Song*” on religious offensive, No.3 “*Nagisa Bridge Elegy*” on lost love repentance, No.4 “*Onaricho Blues*” on regaining lost love, but No.1 “*Soshu Nocturne*” actually very popular prewar days in China, and No.6 “*On the Evening Railway Station*” meant saying forever Sayonara to the lover going to the battle field with little hope coming back alive.

第二部 運命の今昔 古賀メロディを求めて

昨年はジュン葉山を始め、古賀メロディをこよなく愛する明治大学マンドリン倶楽部のコンサート・マスター山下優樹君、同志社大学マンドリン倶楽部出身のプロ奏者平野ユキノリ氏を迎えて、「古賀政男生誕120年記念コンサート」を多彩に展開してきました。

古賀メロディはまさに、「日本の心」を後世に伝えるに相応しい存在であり、美空ひばりさんの歌唱力をあそこまで高めたのも、古賀先生ありてこそと存じます。

古賀政男氏は人間的に実に心の温かい人格者で、とくに両親を大事になされ、その関係者も私共の古賀メロディを愛してくださり、公演にお越しいただくという榮に浴しております。生誕120年の記念事業も私共の渾身の努力で結実しております、

この第2部では先生のご業績をとらえ、なおかつ不十分な点を質して、今後も古賀メロディの顕彰のために努力を続けてまいる所存です。

1. 「粉雪のレクイエム」

これはジュン葉山作詞作曲の持ち歌ですが、古賀先生とその子孫の方々に捧げて。

Jun Hayama wrote and composed this song entitled “*A Requiem of Powder Snow.*” With the deep agony for the people in the Noto Peninsula.

2. 平野ユキノリ作曲によるマンドリン演奏「木屋町しぐれ」

これは橘かほり作詞 平野ユキノリ作曲演奏 ジュン葉山歌唱が定番であるが、敢えて平野ユキノリのマンドリン演奏で聴いて頂く。木屋町は京都の繁華街。木屋町通りに近く、高瀬川が流れ、瀬音もゆかしい情緒満点の料亭が軒を並べる。京都には大学が多く、今は学生たちがたむろして人生の良き思い出をつくる。作曲家平野ユキノリもその一人。恋人と悲しい別れを告げたのも。橘はその心情を汲んで詩を作り、平野に献じ、平野と恋人の未来を占うかたちで励ましたがそれは果たして現実になるや否や。お聴きください。

3. Shake the Bio

平野ユキノリによるマンドリンのソロ演奏

4. 「春の海」

宮城道雄の名曲「春の海」を同志社大学出身の平野ユキノリと明治大学マンドリン倶楽部コンマスの山下優樹による二重奏。

「春の海」 or “Spring Sea” is now very popular in Japan, but originally it was composed by Mr. Michio Miyagi, who with no eye sight, is a gifted player of Japanese traditional harp, depicted calm and gentle spring sea waves so elegant in his tune.

古賀メロディメドレー（平野と山下のマンドリン）

西洋人のクリスマス思慕と京都人の祭思慕には、そのロマンと郷愁という点では共通性が濃厚にある。京都では現在でも玄関にお宝を飾る風習があるのは、西洋人のクリスマスの飾りつけへのノスタルジアとそっくりである。両方とも先祖や幼い日々思いを馳せる。音楽でも共通していて、「祇園小唄」に似た風物を歌う曲目がたくさんあるように、西洋にもクリスマス関連の歌は列挙されているだけでも100曲を超える。

古賀メロディが郷愁を含んで心を打つのも、京都人の回帰心を歌にするに通じる。

What you call “Koga melody” now used to be here in Japan so much well-known tunes that many people humming even after the war when we were not obliged to go to fight battles. Enforced or not, Japanese natives had to endure everyday hard work, otherwise we could not have survived with scarce foods and opportunities to live long.

Masao Koga himself had hardships even when young.

Masao loved his mother so much, but no matter how hard he tried to work, he could not make his mother happy and affluent at all. In later years his so many songs hit and sold he became very well known.

4. ノストラダムスの魂

これは雅号が橘かほりの作だが真筆は濱野成秋。ジャパンがとんだウクライナと成る想定さえある暗鬼夜行の作品。浪漫にもダーカーザンブラックと言える。

休憩 14:00～14:15（15分）

Pre-intermission:

さて、いよいよお待ちかね、第三部：「時」の小笹舟に入りますが、怖いですよ（笑）今から750年前にさかのぼります。その前奏曲として、橘かほり作詞ジュン葉山作曲「ノストラダムスの魂」を歌います。

第三部 元寇七五〇年

「時」の小笹舟 14:55~15:40(45分)

先ほどの「ノストラダムス…」が、音源で流れる中を緞帳が開き、ジュン君、登場。MCで「クリスマスやお正月は何が起こるか判らない。降って湧いたような災難も避けられない。人は「時」の小笹舟に乗って帰らざる川を下る。今を去る750年前、日本に押し寄せた蒙古の大群がありました。（元彌登場でジュン君が紹介。会場から拍手）

ジュン葉山：時の執権北条時宗の苦悩をNHK大河ドラマの主役で再現された和泉元彌さまを、本日、お迎えしました。Q.NHK大河ドラマで北条時宗役の和泉元彌と対談。元寇のような大災害を防ぐに当たって、北条時宗役を、どのような心境で臨まれましたか？を少々語っていただき、あとは演技で…

狂言宗家和泉元彌と対談と演技 NHK 大河北条時宗の心を再現

お礼の曲(1) As Time Goes by 作詞作曲 Herman Hupfeld 歌唱ジュン葉山
この曲は、ハンフリー・ボガードとイングリッド・バーグマンの共演で有名な映画「カサブランカ」で愛し合った二人の思い出の曲として切なく流れる。どんなに時が過ぎても、世の中がどんなに変わっても愛は変わらず。1931年に作られ、1942年映画のヒットと共にスタンダードナンバーとなった。今宵はマンドリンの美しい音色と共にたゆとう「時」の流れをお楽しみください。

◎大団円。出演者全員集合（音源流して）

◎アンコール 15:40~15:45(5分)